

車椅子の看護師に②

榎田 美知子

西アフリカへ

一昨年、長年の夢であった西アフリカのガーナまで独りで出かけた。受傷23年後、60歳。首都・アクラのコレブ地区にある「野口英世」の研究室にたどり着いた時、いろいろな思いが込み上げてきた。この地で黄熱病の研究に生涯をささげた野口英世。彼の研究室や記念碑からは「忍耐」という文字がいくつも目に飛び込んできた。看護師として、アフリカ医療支援を夢見た20歳台後半を思い出しながら、彼の生きざまに今だからこそ思いを馳せることができた。そして自分の足で



野口英世像と筆者
(ガーナ・アクラ)

(車椅子が足) 来れたことも、言葉にできないほど感慨深いことであった。もちろん車椅子だから道中はいろいろなサポートを受けながらである。本当に車椅子生活になってからの方が、人とのふれあいが出来、交流が生まれ、勇気やチャレンジ精神が培われたような気がする。

心のバリアフリー

ガーナに住む友人達も皆笑顔で手伝ってくれた。水道もない、電気も限ら

れている、道路もボコボコの貧しい村で過ごしたが、この心地よさは一体何なんだろう、と不思議な体験だった。近所の皆さんが集まってきては私を歓迎してハグし、そして一緒に大鍋で食事を作る。皆におすそ分けをする。何か懐かしい子供の頃の風景と重なった。

西アフリカに行く前は、アメリカに数回行ったことがあった。アメリカでは、車椅子対応の試着室、ホテルの客室、スロープや建物・公共交通などバリアフリーの整備に驚いた。キャンプ地でも車椅子ユーザーのためのテントもあった。手動装置付きレンタカーもあった。ハード面の整備がスムーズで心地よかった。

しかし、不便な西アフリカの地域で、これらのハード面ではない心地よさは、「心のバリアフリー」だと後に悟った。

60歳からの青春へ

今年も、4月にナイジェリアに行った。首都アブジャにある孤児院を現地の知り合いの医師と、昨年結婚した夫と訪問してきた。親をエイズや病気で亡くした子供たちが多い。この子供たちと触れ合っって新たな思いを抱いた。



ナイジェリア・アブジャの孤児院を訪問

8月28日～30日に、第7回アフリカ開発会議(TICAD7)が横浜で開催された。速くのアフリカが再び身近に感じられ、多くの学びと刺激を受けた。

そして、TICADのパートナー事業のファッションショーに、私達は夫婦で参加することとなった。気がついたらモデルで車椅子は私だけ。私のグループはアフリカンファッションであった。

実際、私はアフリカに行き、アフリカの生活の場に身を置き、人々とふれあい、アフリカンファッションを見て、着て、肌で感じて好きになった経緯があった。そして何と言っても車椅子でも動きやすいデザインだと気付いた。明るく元気な色や柄が多い。障がいがあるがなかるうが、普通のデザインの中に、障がいがあっても大丈夫なデザインがあった。

まさしくインクルージョン&ダイバーシティ。もちろん社会もそうであってほしい。そして、

「自分らしくいいんだよ」と言いたい。それは過去の自分に向けても。

いろいろな意味を秘めながら、繋がる手ごたえを感じながら楽しんだファッションショーであった。

私にとっては、60歳からが第2の青春。野口英世のように恐れることなく、夢に向かって生きていきたい。

(一般社団法人Smile Again代表理事

バリアフリーナース)



TICAD7でのファッションショー